横浜歴史研究会　令和６年　６月例会

遠田千代吉

「龍になった大津皇子」

1.　はじめに

令和６年は、十二支で辰(龍)に当たる。龍は古来、想像の作り上げたものとされている。既に中国では、殷代に「龍」の甲骨文字がみられ、今に流布する龍のイメージは、漢代に形づけられたとされる。中国では、龍は皇帝の象徴であり、偉大さの形容となっている。日本においても、「水」とつながる稲作文化とともに龍の思想が拡がってきたと云われている。日本の伝説や民話に登場する龍の多くは、「水の神」として池や淵に棲み、雨をよんでくれる神として登場している[註 1]。

本論では大津皇子が、龍になったとの記述史料を検証し、加えて薬師寺・龍王社に祀られることとなった背景を探ってみたい。

2.　『薬師寺縁起』

「大津皇子が龍になった」との記述が『薬師寺縁起』(以下・縁起)に記載されている。このことから、ここでは縁起の史料検証から入る。

(1)縁起の撰述年

『縁起』として今に伝わる縁起原本は、「長和縁起」と云われ、平安時代の長和４年(1015)に撰述されたものとされている。その根拠は、薬師寺の来歴が長和４年まで記載されていることによる。

(2)記載されている内容

①薬師寺の歴史

薬師寺の草創と、藤原京から平城京に移転して寺観を整えるまでの記事。

②天武天皇の系譜

薬師寺の草創願主である天武天皇、同妃、皇子・皇女の系譜記事。

③伽藍の構成

薬師寺伽藍の構成と整備にかかわる記事。

(3)伝えられている三本の写本

『縁起』の原本とされる「長和縁起」は、現在残されていない。しかし、写本三本が伝えられている。

①薬師寺本　　寛元元年(1243)書写

②醍醐寺本　　建永２年(1207)書写

③護国寺本　　康永４年(1345)書写

いずれも鎌倉時代以降の写本である。この三本の写本には、細かな字句の相違や、かな

りの記事内容の出入りがある。

(4)本論で準拠とする写本

本論では、①の薬師寺本を準拠として論述する。他の二本の写本に比べ最も記事が豊富に記載され、「長和縁起」の原本の姿を最もよく伝えているとされる。また醍醐寺本には天武天皇の皇子女記事が比較的詳細に記されていることから、必要に応じて補う。

3.　縁起に記される大津皇子　　―　大津皇子龍になる　その一　―

(1)縁起に記される大津皇子

縁起における大津皇子にかかわる記載文は、次の通りである。ここでは『薬師寺縁起釈文』による読み下し文で示す。

「大津皇子

持統天皇4年庚寅正月、大津親王等を禁じ、乃ち害殺せらるなり云々。

今案ずるに、伝えて言ふ。大津皇子世を厭ひ、不多神山(ニ上山)に籠居したまふ。而るに謀告に依って掃寺(*掃守司蔵)に禁ぜられること七日なり。皇子惣ちに悪龍と成り、雲に騰り毒を吐き、天下静かならず。朝廷(みかど)これを憂えたまふ。義淵僧正は皇子平生の師なり。乃て修円に勅して、悪霊を咒せしめたまふ。而るに念気未だ平げず。乃ち修円空を仰いで、一字千金と呼ぶ。悪霊承諾(うべな)ふ。仍て皇子の為に寺を建て、名づけて龍峯寺と曰ふ。葛下の郡に在り。掃守寺是なり。

又七月廿三日、宣旨を薬師寺に賜はり、六十口の僧を請い定め、威・従四人、七ケ日の間、大般若経を転読せしめたまふ。その布施は、信乃の国に在る也。」［註2］　*印醍醐寺本

この縁起記載文の骨子・構成は次の通りとなっている。

●大津皇子

先ず、大津皇子の項目立てが行われ、皇子の経歴として害殺の事実が記されている。

●大津皇子にかかわる伝承・記録

次に、大津皇子にかかわる伝承・記録の記載が続く。その要旨は、次の構成となっている。

①大津皇子は世を厭い、二上山に籠居していたが、謀告により掃守司蔵に禁足となった。
　のち、皇子は怨念から龍と成り、雲に騰り、天下の静謐を乱した。

②朝廷は、この事態を憂えて、高僧2名を派遣し、祈祷・調伏に努めた。

③のち、皇子の為に、龍峯寺(掃守寺)を建てた。

④朝廷は、宣旨を薬師寺に賜り、皇子のために、大般若経を転読せしめた。

(2)大津皇子が龍となった場所

大津皇子の縁起記載文の理解のために、先ず背景となった場所の理解が必要である。

①加守の地

縁起の記載記事は、今の奈良県葛城市加守にかかわるものである。「加守の地」は、二上

山の東麓で、尾根からの支脈が東に延びる傾斜地となっている。当麻寺から北に道をたどると、大津皇子の墓とされる鳥谷口古墳、石光寺を経て、加守に至る。二上山東麓の諸古跡でも最北に位置する。なお、加守(かもり)の地名は、掃守(かにもり)の転訛したものと云われている。

②掃守氏

この二上山山麓の加守の地を本拠としていた豪族が掃守氏(連)とされる。掃守は、目にする機会の少ない官職名であるが、後宮十二司の一つであり、掃司(かにもりのつかさ)は、朝廷諸行事の設営を担当する宮司であった。「加守の地」は、この掃守氏の本拠地であった。

③掃守寺(加守廃寺)

ここ加守の地に所在する古代寺院跡(加守廃寺)が、掃守寺であり、掃守氏の氏寺とされている[註 3]。現地は、平地からは見上げる山域にあり、山岳寺院ともいえる。

廃寺跡から、往時の伽藍を推測すると、次の通りとなる。

○南遺跡　　中心部であり、長六角堂・堂池で構成されていた。

○北遺跡　　中心部から尾根支脈を隔てて北に在り、回廊に囲まれた塔が立っていた。

ともに遺跡跡からは奈良期の瓦が出土しており、奈良時代初頭～中期の建立と推定されている。この寺は、江戸時代を通じて存続したが、明治に入って廃寺となった模様である。現在は、生い茂る草木の間に、小さな四天王堂が立つのみであり、往時の姿は偲べない。

(3)縁起記載文の検証

ここから縁起記載文の検証に入りたい。記載文は史実と相違する部分もみられるが、項目毎に検証していく。

●大津皇子の経歴について

「持統天皇 4 年庚寅正月、大津親王等を禁じ、乃ち害殺せらるなり云々」と記載されている。ここでは持統天皇 4 年(690)に皇子が拘禁され、害殺されたとするが、大津皇子の謀反事件が起こり、処刑されたのは朱鳥元年(686)のことである。また、大津親王「等」の記載がみられるが、親王妃山辺皇女を含めてのこととされている。なお、『日本書紀』では「皇子が謀反により賜死」と皇子側の責任を強調する表現で一貫しているなかで、ここ薬師寺の『縁起』では、朝廷側が「害殺」との表現が採られていることは、注目しておく必要がある。

●大津皇子にかかわる伝承・記録

前に記した要旨区分に従って検証する。

①「大津皇子二上山への籠居、禁足、龍と成る」

大津皇子は朱鳥元年の謀反事件後、二上山に籠居、さらには掃守氏関連施設に禁足となった事実はない。いずれも皇子が二上山に移葬された(鳥谷口古墳と推定)ことから広まった言い伝えと思われる。また、「皇子が龍(悪龍)と成り、雲に騰り毒を吐き、天下静かならず」とされるが、害殺された皇子の怨念の思いが、龍に姿を変えて現れたとする表現と思われる。概して日本では、龍は水神として崇められるものであり、悪龍となる事例は少ない。

もともと二上山は、周辺の郷村にとって稲作に欠かせない水の源であり、水神として崇められ、旱時には雨を祈る山であった。ここに、「水にかかわる龍」の介在する可能性が高い。

また、雨上がりには、二上山の谷に霧が湧き、集積して「龍の雲」として流れる姿が、眺められた。山村にあって「龍の姿」が現れる機会は多いのである。

②「朝廷は、この事態を憂えて、高僧2名に勅し、祈祷・調伏に努めた」

ここでは朝廷が、この事態を憂えたとの表現が、重要なことを示唆している。謀反事件により害殺された大津皇子の怨念が残り続けることを恐れているのである。この状況を打開のため、朝廷は義淵、修円に勅して祈祷、調伏に努めた。

ここに高僧2名が登場するが、各々の活動の時代背景をみておきたい。

〇義淵(ぎいん)　？　～　728

奈良時代の法相宗の著名な高僧である。当初吉野郡に龍門寺を開き、盛んに法相宗を広めた。のち岡寺(龍蓋寺)を開創した。大宝3年(703)には僧正に任じられ、26年間興福寺僧正の役割を果たした。神亀4年(727)聖武天皇より岡連の姓を賜っている。弟子は極めて多く、玄昉・行基・良弁等が門下であり、道慈・道鏡も就いて法を学んだ。

〇修円(しゅえん)　771　～　835

平安時代前期の高僧である。弘仁元年(810)興福寺にて律師に任じられ、同13年(822)には興福寺別当に就任し、13年間役割に任じている。室生寺とも繋がりが深い。

このように、縁起記載文に登場する高僧2名の活動時期は違う。義淵は奈良時代前期であり、修円は平安時代前期である。従って二人が同時に登場することは、史実に相違する。加えて義淵が大津皇子の平生の師とされているが、その事実はなく、義淵は草壁皇子とのつながりがあったとの史料が残されている。

ともかくも修円の懸命な祈祷にもかかわらず、龍となった大津皇子の念気が解けなかった。最終的に修円は、空を仰いで「一字千金」と呼ぶや、龍は承諾し、念気が解けたとされる。ここに登場する「一字千金」の呼声の意味が不明である。中国古代、秦の時代の『呂氏春秋』以来の諺であり、「文字または、文章の非常に優れている」形容として使われる。大津皇子は、『日本書紀』でも、「文筆を愛みたまい、詩賦の興、大津より始れり」とされていることから、これを賞賛され、念気を解くに至ったのであろうか。

③皇子の為に、龍峯寺(掃守寺)を建てた

先に掃守寺(掃守廃寺)については記述したが、史実と相違する。文献史料として醍醐寺本『諸寺縁起集』があり、義淵草創の吉野・龍門寺に関連して、次の記述がみられる。

「又有龍引導寺、龍本寺掃守寺、在大和国葛下郡、官令掃守司、施僧正給」

とあり、掃守寺は掃守司につくらせて、義淵僧正に施されたとする。出土する考古史料からも時期が合致し、龍峯寺(掃守寺)は掃守氏の氏寺として造営され、義淵管理の一門に入ったものと思われる。

④朝廷は、宣旨を薬師寺に賜り、皇子のために大般若経を転読

縁起記載文のなかで、最後のこの部分のみが他と文脈を異にする。突然に七月廿三日の月日が登場し、薬師寺に賜った宣旨に触れられている。しかし私自身は、この記載部分は、薬師寺行事の由来、背景を今に伝えるものとして重視している。

六十口の僧とは、六十人の僧である。威・従四人とは、僧の風紀等を監督する威儀師・従威儀師合わせて四人の意である。この陣容で七日間の経の転読であり、朝廷としても大津皇子の念を鎮めるため、相応の必要性を感じてのことと思われる。さらに、ここで見落としてならないのは、「其の布施は、信乃の国に在る也」の表現である。この表現の解釈としては、「この行事の布施として、信濃国に領田を賜った」となると思う。私自身は、以後年々、薬師寺で大津皇子を祀っていく恒久的資財として領田を賜ったと解釈している。これが薬師寺で、今に続く「龍王社祭礼(大津宮御祭)」であると思っている。

(4)縁起記載文のまとめ

詳細にわたり、縁起記載文の検証を行ってきた。ここに至り、そのまとめを行っておきたい。

①この縁起記載文は、平安期の長和4年(1015)に過去を振り返り、撰述されたものである。従って、時が圧縮され、事象が前後するなど史実と相違する部分が多い。

②しかしながら、大津皇子が、ここ二上山の地で龍となった記述については、それを生む素地があったことを理解すべきである。

〇二上山が水の源の水神として崇められる対象であったこと。加えて旱魃時には「雨乞い」の山として、祈りの対象となっていた。いずれも龍神に結び付きやすい。

〇この二上山に大津皇子が葬られた。皇子に対する同情心から、皇子が龍となり世の静謐を乱すことも理解されやすい。

③時の朝廷は、大津皇子の念気を鎮めるため、薬師寺で年々皇子を祀っていくことも、必要と認めた可能性がある。この縁起記載文は、この祀りの由来を記録する意図をも持っていたと思われる。

4. 薬師寺の龍王社 ― 大津皇子龍になる その二 ―

薬師寺南門を入り、すぐ右側、奥まったところに龍王社はある。東院堂の南東部に位置し、ひっそりとたたずむ社殿が龍王社である。龍王社の祭神は龍神と大津皇子とされ、また「大津龍王宮」とも云われて大津皇子ゆかりの社とされる。薬師寺には、この龍王社に祀られていたとされる大津皇子坐像も伝存している。

(1)大池と龍王社

龍王社は、もとは薬師寺境内の外に建っていた[註4]。薬師寺南西200mほどのところに「大池」と呼ばれる池があり、その北側の高台に所在していた。現在でも大池の南側から、望めば、こんもりした樹木が生い茂る丘陵となっている。今は、「佐波天神社」が祀られている。この地での龍王社の存在は、文献史料では鎌倉時代までさかのぼれるが、草創の時期ははっきりしない。この地で永い間、薬師寺の管理下、周辺地域農民から「水と雨乞い」の神として崇められ、祀られてきたのである。また大池の歴史は古く、万葉集に登場する「勝間田池」が大池であると云われ、既に奈良時代には存在していた。龍王社は、この古い歴史を持つ大池の鎮守として祀られてきたのである。

(2)龍王社の移転

龍王社は、ここにみたように中世以降、江戸時代を通じて大池の北側に存在してきたが、明治維新後に、薬師寺境内へ移設された。この時は、東塔の南に移設された。その後、薬師寺の伽藍復興が進むなかで、昭和 49 年に境内の現在の位置に再度移設された。

(3)龍王社の祭礼

龍王社の祭礼は、現在毎年 7 月 26 日に行われている。しかしながら、江戸時代の終わり頃までは、恒例の祭日は 8 月 23 日であった[註 5]。鎌倉時代に記述された文献史料(『黒草紙』)に、薬師寺の年中行事の一つとして、次のように記されている。

「八月　廿三日、大津宮御祭」

龍王社の祭礼が、鎌倉時代には恒例化していたのである。

(4)龍王社祭神としての大津皇子

何故、大津皇子が龍王社で祀られる神となったのであろうか。本来「龍王」は仏教用語であり、仏陀を守護する者とされるが、日本では古来意味が転化し、水の神・龍神として「雨乞い」の対象とされてきた。大津皇子は、龍王社の中で龍神とともに、ある意味「龍になり」崇められてきたのである。ここに至った背景として、既に記述した「二上山で龍になった」大津皇子の伝承が、龍王社につながっていると思う。縁起記載文の「七月廿三日、宣旨を薬師寺に賜り、経を転読せしめた」ことの薬師寺での恒例行事化したものが、薬師寺での龍王社(大津龍王宮)・またその祭礼(八月廿三日)であると考える。

5.　まとめ

龍になった大津皇子を「その一、その二」として述べてきた。ここに至り、まとめとして次のことが云える。

①二上山という地域特性のなかで、ここに葬られた大津皇子が龍になった。

●二上山は、周辺郷村にとって「水の源」として崇められる山であること。
　日頃から、旱魃・日照りが続くとき降雨を祈る山として「祈りの対象」であった。
　二上山は、「水神としての龍」の棲息する山であった。

●害殺された大津皇子が、この二上山に葬られた。
　このことへの同情が、皇子の念気を「強いものとしての龍」に転化させた。

②大津皇子の、この念気を鎮めるため、朝廷は薬師寺に宣旨を発し、経を転読せしめた。このことが以降、薬師寺において龍王社(大津龍王宮)が祀られる由来となった。

天武天皇の皇子は、10 人の数を数える。このなかで、悲劇の最後を遂げたのは、大津皇子、ただ一人である。しかしながら、大津皇子は今もいきている。薬師寺において、大津龍王宮として祀られ、年々龍王社の祭礼が行われているのである。

―　了　―

［註・参考文献］
［註 1］　荒川　紘　　『龍の起源』　　紀伊国屋書店　　1996 年
［註 2］　薬師寺　　『薬師寺縁起釈文』　　1967 年
［註 3］　和田　萃　　「大津皇子の墓」
　　奈良文化財調査報告書 67 集　　『鳥谷口古墳』　　1994 年
［註 4］　宍戸香美　　「薬師寺の龍王社」　『月刊大和路・ならら』
　　なら文化交流機構　　2022 年 1 月号
［註 5］　［註 4］に同じ

閑話休題　二題

その一　　「ダケのぼり」

　二上山周辺の郷村を「ダケ郷」と呼ぶ。ダケ郷は二上山を水源とする地域であり、大和側は勿論、河内側も含む。二上山の雄岳の頂上に鎮座する葛木二上神社が「ダケの権現さん」と呼ばれ、水の神として信仰されている。

　旱魃の年にはダケ郷によって雨詣が行われ、幟（のぼり）をもって頂を目指す。

「嶽の神様　のぼりがお好き　のぼりもてこい　雨ふらせ」

と叫びながら、山頂へ参るのである。

　また、今でも 4 月 23 日には例祭が行われている。もとは旧暦 3 月 23 日に行われていたものであり、人々は弁当を携えてダケに登り、一日遊楽を尽くす。この例祭は、今でも行われており、春に例祭が近づくと、周辺の村々には幟が立てられ、風にはためく幟が人々をダケのぼりに誘っている。

その二　　「勝間田池の万葉歌」

　大池は、かつて「勝間田池」と呼ばれていた。唐招提寺は、新田部親王の屋敷跡に建てられた。今も薬師寺・大池と唐招提寺は隣り合わせであり、比較的近い。新田部親王が、この屋敷にお住いのころ、勝間田池に出遊し、一日楽しまれた。蓮をはじめ花々の景色のすばらしさを、帰ってから夫人に、我がことのように自慢し、話して聞かせた。

ところが、夫人は冷めたもの、このように詠ってかえした。

萬葉集　巻 16　3835　新田部親王に献ずる歌

　　勝間田の　池は我知る　蓮（はちす）無し　然（しか）言ふ君が　鬚（ひげ）無き如し

夫人は、勝間田池に蓮がないことを知っていた。皇子に「ますらおらしい鬚のないこと」にかこつけて、皇子の自慢話の鼻をへし折っているのである。万葉の戯歌（ざれうた）とされる。

いにしえよりいつの世も、女性は存外、強いのである。